

壺屋焼における窯をめぐる問題について：アメリカ 占領期を中心にして

宮地，英敏
九州大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/7172121>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．39，pp.33-58，2024-03-25．九州大学附属図書館付
設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：



【論説】 壺屋焼における窯をめぐる問題について

——アメリカ占領期を中心にして——

宮 地 英 敏

一、はじめに

アメリカ占領下から日本への本土復帰の時期にかけて、沖縄の陶磁器産地である壺屋をめぐる窯の煙害問題が顕在化していたことはよく知られている。那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一五）^①は、平成二七年度に「現代沖縄陶芸の歩み」というタイトルで企画した企画展の図録であるが、その第一章でこの煙害問題について扱ったことを紹介している。日本本土で大気汚染防止に関する規制が強化されていた中で、沖縄においても煙害を問題視する機運が高まっていたという。その結果、薪を燃料として使用しつづけた金城次郎（一九二二―二〇〇四、一九八五年に人間国宝）らは壺屋を立ち退いて新たな地を求めることになった。また壺屋で生産をつづけたい者たちは、ガス窯へと転換していったことが明らかにされている。

この企画展も担当した那覇市立壺屋焼物博物館の主任学芸員でもある倉成多郎は、一九六〇年代後半からの煙害の顕在化を、戦後の那覇市復

興における拠点が壺屋であったことと関連付けて紹介した。沖縄戦において偶然にも那覇市内で焼け残った壺屋は、戦後にいち早く多くの人々が押し掛け、それによって住宅密集地となっていた。そのために壺屋焼とは関係ない住民たちによって、煙害などの公害問題への意識が高まっていたことが指摘されている。^①

さて、この壺屋における煙害問題であるが、那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一五）ではさらに、「壺屋の登り窯にもその規制が及ぶことになる。（中略）新たにガス窯を導入する窯元が増え、登り窯を取り壊してしまふ窯元も増えていった。のちに人間国宝となる金城次郎はもとも壺屋の登り窯を共同で使用し焼成していたが、登り窯を使い続けられる環境を求め、一九七二年読谷村に新たな登り窯を築き壺屋から移住していった」と紹介される。^② また、倉成多郎（二〇一四）でも、「多くの壺屋陶工が近代窯に転換する一方で、金城次郎はあくまで登り窯での焼成にこだわり、一九七二年に登り窯が焚ける読谷村に制作の場を移した」というように、のちに人間国宝となった金城次郎のエピソードに重きを置いて

いる。⁽³⁾

金城次郎は、魚や海老をモチーフとした図柄で知られ、柳宗悦（一八九一―一九六二）、河井寛次郎（一八九〇―一九六六）、濱田正司（一八九四―一九七八）やバーナード・リーチ（Bernard Leach、一八八七―一九七九）といった民藝運動を代表する面々と親密であり、壺屋焼を代表する陶芸家である。⁽⁴⁾そのため、金城次郎が登り窯を焼くために読谷村へと移転したことが強調され、壺屋における登り窯の終焉が象徴的に語られてきたのである。

この金城次郎が壺屋において利用していた窯は、現在は国指定重要文化財「新垣家住宅」の敷地内にある東又窯である。⁽⁵⁾九室が連なった連房式登り窯であるが、当時は十一室あったと言われており、現在でも壺屋の観光スポットとして有名である。また同じく壺屋を代表する登り窯としては、筒状登り窯である南又窯が知られており、一九九〇年代初頭には有志のアラヤチ会によって窯を復活させたうえで焼成も何度か行われたという。⁽⁶⁾壺屋に史跡として現存している登り窯は、この東又窯と南又窯の二つのみであるが、吉田健太（二〇二二）では、明治期から昭和戦後期にかけて五三もの窯が存在していたことを整理している。

一方で、登り窯からガス窯への転換が比較的スムーズに行われたこともまた指摘されてきた。煙害への対策として地元の壺屋から移転するよりも、本土復帰前後の好景気の中で壺屋に残りつつ焼き物をつくるためにガス窯や灯油窯を受け入れたというのである。⁽⁷⁾

しかしながら、陶磁器業における窯の技術史的研究を踏まえたとき、この本土復帰に前後した時期における登り窯からガス窯への転換がスムーズにいったことは、驚くべきことでもある。なぜならば、登り窯は燃料

として薪を使用しているが、その薪を燃焼した際の灰が釉薬としての役割も果たすことにより、焼成後の陶磁器には個性的な味わいに加わるからである。⁽⁸⁾他方でガスを燃料とした際には灰がでないために、焼成後の釉薬の役割を果たすものはない。これによりガス窯の使用は、民藝としても高名であった壺屋焼の評価を一転させる可能性を持った危険な行動であったともいえる。このように登り窯からガス窯へのスムーズな転換については重要な論点を孕んでいるのであるが、これまで十分に検討されてきたとは言い難い。

本稿の目的は、金城次郎のエピソードや現存する東又窯・南又窯によって登り窯について語り語られている壺屋の窯について再検証することである。結論から述べるならば、煙害の問題は、従来の研究史が指摘するよりも早い時期から問題視されており、それが一九六〇年代後半に一気に顕在化したものであった。そしてその対応としてのガス窯への転換のはじまりは、高江洲育男の企業家精神によるところが大きい。加えて経済史・経営史的には、壺屋における窯の転換が登り窯からガス窯へというものであったとしても、学術的に扱われてきた倒炎式薪窯の影響もまた技術史的には欠かすことができない。そしてそれがまたフィードバックして、経済史・経営史的に大きな意味を持っていた。

以上の点を、戦前からアメリカ統治下、そして日本本土への復帰の時期の沖縄陶磁器業について、壺屋という土地にも軸足を置きながら考察していくこととしたい。

「一、はじめに」につづく第二章および第三章では、地理学的な分析手法でもある景観論の視点を取り入れつつ、壺屋の変遷を見ておくこととしよう。そして第四章で壺屋における煙害問題の発生を確認し、第五章

では煙害問題に大きな声を上げた黒潮武秀に焦点を当てる。第六章では登り窯からガス窯への転換を高江洲育男に焦点を当てつつ分析する。そして第七章でそれ以外の壺屋の窯元・陶工について紹介する。また、第八章では鳥袋常孝にも焦点を当てつつ倒炎式薪窯を含む焼成用の窯の技術史的分析を加える。以上を踏まえ、おわりにでは煙害問題が壺屋と壺屋焼に与えた影響を総括することとする。

二、戦前の壺屋の景観

戦前の壺屋は、農村の中に窯がある状況であつた。一九一（明治四四）年生まれの金城次郎は、次のような回想を残している。

むかしの壺屋は半農半陶だった。焼き物の産地と知られていたが、年から年中焼き物を作っているわけではない。島内需要にふり向けるだけで県外に出すのはまれだったので需要が限られていた。畑を耕しながら焼き物も作るという暮らしだった。イモを植えたり、それぞれ一、二頭程度は豚も飼っていた。私の家は貧しくて土地がないので、借地をして小作をし、イモとか野菜などを作っていたが、主にイモを植えていた。⁽⁸⁾

のちに沖縄県立芸術大学学長となる宮城篤正（一九三九—）も同様のことを述べており、「のどかな田園風景の中に壺屋の登窯や民家のたたずまいがみられた」と壺屋を紹介しつつ、「戦前の壺屋の暮らしは半農半陶で年中陶器ばかりを作っているのではなかった」という。⁽¹⁰⁾「壺屋の人々は

一カ月に一回位の割合いで窯を焼き、そのあとは農業に従事するといった風であつた」とされる。⁽¹¹⁾

また、河井寛次郎が柳宗悦や濱田庄司らとともに、壺屋の新垣栄徳（一八九一—一九四九）のもとに滞在した時の紀行文が残されている。それを掲載しておこう。

那覇から首里へ続く街道は町を出ると直ぐに低い丘の起伏する野原の中へ這入る。砂糖黍や芋畑に続く丘と云ふ丘はみな芝草に掩はれ、⁽¹²⁾どの丘も見事な松を頂き、斜面には幾つかの不思議な墓が並んでゐるのが見えてくる。道は地形に沿うて曲りながら次々に眺めを変へる。豚を担いだ男が通る。箆を頭にのせた女が行く。赤い瓦の家が緑の中に浮き出す。こんな道の右手に壺屋の部落は盛り上げられてゐる。⁽¹³⁾

金城次郎の回想と河井寛次郎の紀行文に共通しているのは、畑作としてイモを栽培していたという点と、豚が飼育なり輸送なりされていたという点であろう。豚の飼育については、小橋川永昌（一九〇九—一九七八、二代目仁王）も陶土や薪を運搬するための馬とともに豚も飼育されていたことを回顧している。⁽¹³⁾

日本本土においては、青木昆陽（一六九八—一七六九）が薩摩から取り寄せて江戸で普及させたためにサツマイモと呼ばれているが、沖縄ではこれをカライモ（唐芋）と呼んでいた。一六〇五（慶長一〇）年に北谷間切の野国村出身である総管役のポストにあった者（与那覇某）が、明へ渡って「蕃蔗」を持ち帰った。これがカライモとして沖縄で普及していくこととなる。⁽¹⁴⁾

また、河井寛次郎は叙述しているものの金城次郎は触れていないサトウキビについては、河井寛次郎とともに沖繩を訪れた濱田庄司も「壺屋の道は古風な石垣に囲まれ、曲がり角には今も残る榕樹がしきがあつて、今と同じように子供たちが登っていた。(中略)細工場の前は見渡す限り砂糖黍畑が広がっていた」と回顧している。⁽¹⁵⁾ 沖繩の内には金城次郎はあまり意識していなかったが、沖繩の外から訪れた河井寛次郎や濱田庄司の目には、サトウキビ畑は印象的だったのであろう。⁽¹⁶⁾

一方で豚は、沖繩料理には欠かせない食材である。そのため明治末年には日本全体の「豚数の半数は琉球が占めて」いたと言われるほどであった。種類としては、「在来の嶋豚及唐豚の二種類があります。嶋豚は田舎地方に散在し、後者は首里、那覇地方の都会に飼養せられて居ます」と言われているため、壺屋の豚は「唐豚」であつたと思われる。「嶋豚」が「体や少々長く色は黒く、毛は粗剛、顔は長く口は尖り背は凹み腹は垂れて居ます」という姿形であつたのにないて、「唐豚」は「白色豚」であり中国経由で若しくはイギリス船から持ち込まれたものであるという。そして「在来種と雑種して多少頭も短く、肢も短く背は少しく凹み、体の大きさは在来種と同じく、肥満の度は之に勝れたるものを作出するに至つた」という。⁽¹⁷⁾ つまり、当時世界中を席卷していたヨークシャー種が沖繩へと伝わり、それと在来の島豚とが自然に掛け合わされて品種改良されたものが、壺屋で飼育されていた豚であると思われる。

このように、サツマイモ畑やサトウキビ畑、そして豚小屋なども点在していた壺屋で、半農半陶の生活をしていたが、「壺作りだけでは飯が喰えなくて半分は畑仕事をしてみんな暮らしていた」わけである。それでも壺屋の陶工たちは貧しく、「次男・三男がブラジルとかハワイへ出稼ぎ

に行っている」ような状況であつたという小橋川永昌（二代目仁王）の回顧談も残されている。⁽¹⁸⁾

また壺屋は近隣で陶磁器原料が採掘できた場所でもある。壺屋の南側の神里原あたりで黒土が採掘でき、西側の桜坂から北側にかけてと現在の壺屋小学校あたりで赤土が採掘できたという。⁽¹⁹⁾ 壺屋小学校は壺屋から三・四〇メートルほど離れているが、神里原や桜坂は壺屋から一・二〇メートルの距離であり、壺屋付近で陶土が採掘できたことがそもその壺屋の立地にもかかわっている。⁽²⁰⁾ そして、その陶土が採掘される場所の景観は、先ほど河井寛次郎は「低い丘の起伏する野原」と表現していたが、陶土がタヌキ掘りできる丘陵部が広がっていたことを意味しているのである。

以上のように、農村が広がり丘陵もみられるなかに、陶磁器を焼成する窯はあつたのである。昭和一〇年代には、壺屋には上焼窯が四基、荒焼窯が八基、土器窯が二基の合計一四窯があつたという。⁽²¹⁾ 壺屋焼の分類は一般の陶磁器の分類とは若干異なり、炆器とマンガン釉のかかった陶器を荒焼と呼び、マンガン釉以外の釉がかかったものを上焼と呼んでいる。⁽²²⁾ 焼成の燃料としては琉球松が使用されていた。⁽²³⁾

さて、半農半陶の壺屋であつたが、アジア・太平洋戦争では戦時体制に組み込まれ、軍需物資である軍洋食器や磚子、さらには「でっち」という謎の筒を作らされていたという。ただしそのために「兵役免除」が通達されていた。⁽²⁴⁾ 戦争も佳境にさしかかり、一九四四（昭和一九）年一〇月一〇日には那覇大空襲が行われたが、壺屋は焼け残った。この際に、陶工たちの家族の多くは北部へと疎開していった。⁽²⁵⁾ 一九四五（昭和二〇）年三月二六日には沖繩戦がはじまる。その開始前には那覇市への空襲も

激しくなっており、壺屋の陶工たちは沖縄戦がはじまる直前に沖縄島北部への疎開を行っていたのであった。このため、壺屋の民藝（上焼）をつくっていた陶工については、八軒ほどの窯元があったが生き残ることができたのである。⁽²⁶⁾ また、登り窯も戦時中にあった一四基のうち五基が戦後まで残った。⁽²⁷⁾

ちなみに、壺屋では戦前から「何処の家でも屋根には魔除けの獅子や鬼面が空をにらんで居」た。⁽²⁸⁾ このため、やちむん会の会長も務めた平良邦夫は「壺屋だけは屋根シーサーの魔除けの効があったのか焼け残った」と叙述している。⁽²⁹⁾ 壺屋を護ったシーサーは戦後の復興の中で、沖縄の各住宅や街頭などの場所で戦前以上に多く設置されていくことになる。⁽³⁰⁾ 沖縄の人々にとって、護り神であるシーサーがたくさんいた壺屋が焼け残ったことは大きな意味を持ったと言えよう。

三、戦後の壺屋の復興

戦後、壺屋への帰還にあたって中核的な役割を果たしたのは、戦前は沖縄県工業指導所長などの要職にあり、戦後は収容所の住民組織であった沖縄諮詢会の商工部長となっていた安谷屋正量である。⁽³¹⁾ 安谷屋正量部長は、「不思議にも壺屋町だけは戦禍を免れ、家屋も焼成窯もあまり傷んでいないし、原材料も豊富に残っているという噂を耳にした」ことから、アメリカ軍側と交渉することとなった。そして一九四五（昭和二〇）年九月には、琉球列島米軍政府のニール・ヘンリー・ローレンス（Neil Henry Lawrence）商工隊長を誘って壺屋の調査に出かけ、「業者さえ移住すれば直ぐ生産できる状態にあるのだから、一日も早く陶器業者が移

住できるように取計ってもらいたい」と伝え、アメリカ側の商工隊長も快諾したのであった。⁽³²⁾

その後、軍政府の上層部との交渉が二ヵ月もかかることになり、その間に壺屋へ帰る陶工たちを集うこととなった。それを担ったのは荒焼をつくる窯元の三男として生まれ、戦前はアナキスト壺屋グループの中心メンバーであった城間康昌や、同メンバーでかつて真和志村助役でもあった辺野喜英長らであった。⁽³³⁾

こうして一九四五（昭和二〇）年十一月には、一〇〇名を超える人々が壺屋先遣隊として那覇市へと帰還することになるのである。そのうち陶工は三〇人ほどで、その他に衛生班、食糧班、警察官、役所関係者などが加わったという。⁽³⁴⁾

壺屋先遣隊の一人であった島常賀（一九〇三―一九九四）は、この時の様子を次のように回想している。

敗戦後の壺屋は、家は壊され草がぼうぼうと生えていた。戦前の面影は、どこにもなかった。先発隊は百人ほどにふくれあがっていたが、半分以上は壺屋以外のひとだった。まずは片づけが先だと、焼け跡や崩れた石垣、道路に散乱しているがれきなどの整理を始めた。まだあちこちには死体も転がっており共同墓地を造って葬った。一部の人は、壊れた窯の修理に取りかかった。私たちが来て間もなく、大城鎌吉氏を隊長とする設営隊が壺屋入り。本格的な家の修復が始められた。⁽³⁵⁾

同じく壺屋先遣隊に参加した金城次郎も、「幸い壺屋には焼け残った家屋があり、そこへ分宿し、仕事に取りかかった。窯は一部こわれたのが

【表 1】那覇市の人口（1946年）

	人口（人）	内15歳以下（人）
1月	983	
3月	1,279	277
7月	1,930	709
8月	2,064	747
9月	2,469	919
10月	2,340	1,206
11月	4,065	1,530
12月	8,079	3,023

出典）那覇市教育史研究会編（2004）3頁。

あり、まず窯の修理から始め、すぐマカイとかサラ、湯飲みなど日用雑器の製作をはじめた」と回顧している。⁽³⁵⁾当初の噂話ほどには壺屋が元通に残っていたわけではないが、それでも他の那覇市内のエリアと比べれば、「焼け残った」といえる状況であった。また、マカイとは飯用にも汁物用にも使える茶碗のことである。アメリカ軍の指示で茶碗や皿、湯飲みといった飲食器の生産が急がれたことが分かる。

一九四六（昭和二一）年一月になると、壺屋先遣隊の人たちの家族が壺屋に帰ることを許された。それと同時に、糸満地区管内の壺屋区役所が設置され、先述のアナキスト壺屋グループの辺野喜英長が区長に、城間康昌が助役に任じられた。島常賀は住居割り当てを行う宿舎係となっている。その島常賀によると、「修復がすみ人が住める家が六十七軒。ただでさえ少ないのに家族以外に壺屋の縁故知己を求めて移動してくる者が後を絶たない。やむなく一軒に五、六世帯を押し込んだ」という。⁽³⁶⁾

こうして一月中には、九八三人もの人々が壺屋へと戻ることになった（【表1】）。また、「子供たちもどんどん帰ってきた」ものの、「米軍部隊の兵隊たちが、ときどき壺屋に女を探しに入ってきた」ていて「物騒なうえに、不発弾はゴロゴロしているし壊れた家も多い」ため、「こんな状態の中で子どもを放っておいたら危険だ」ということになり、一九四六（昭

和二一）年一月二七日には早くも壺屋初等学校が開校している。戦後の那覇における最初の小学校であった。⁽³⁸⁾職員は九人、児童数は一五五人を数えた。ただし立地箇所は現在の壺屋小学校のところではなく、壺屋より南東方面に隣接する寄宮地区に置かれた。

こうして壺屋はたちまち市場のような賑わいを見せるようになっていった。これは、安谷屋正量とニール・ヘンリー・ローレンス商工隊長との当初の約束である三〇人の移住から大きくかけ離れた事態であった。しかしながらニール・ヘンリー・ローレンス商工隊長は「温情と寛容」でこの約束違反を黙認したため、さらに壺屋から牧志へと移住者が溢れるようになっていったのである。⁽⁴⁰⁾

これが加速するのが一九四六（昭和二一）年一月以降のことである。【表1】でもこの時期から那覇市の人口が激増していくことが分かる。その切っ掛けは同年九月に九州へ疎開していた人々（子どもたちを含む）が帰還をはじめたことにあるが、同年十一月以降になると一日当たり数名、多い日では二〇人を超える児童が壺屋初等学校にも転入している。⁽⁴¹⁾

こうした中、一九四六（昭和二一）年一月六日には、壺屋初等学校は現在の壺屋小学校がある牧志へと移転した。⁽⁴²⁾創立時の壺屋初等学校は、「それこそ粗末で校舎といえば大型なテントを、よほどに張り、職員室も小さなテントで、みすばらしい小屋でしたが、もちろん机などありません。火薬の入っていた長い空き箱の椅子に腰掛、小さな黒板に先生のか、れるのを写したのが教科書のかわりでした。校庭は斜面で立派な運動場ではありません。土に半分うもれた破片がちらばつて私達はよく足をけがしました」というような状況であった。⁽⁴³⁾そのために、アメリカ軍部隊が移動してコンセット兵舎（Quonset Hut）⁽⁴⁴⁾が残されていた牧志へ

と移転したのであった。⁽⁴⁵⁾

こうして壺屋・牧志両町への移住者は増えていき、闇商人なども自然発生し、往来の両側にはこれら商人たちの掘立小屋がいっぱいに立ち並びようになっていった。人々はこれを町小と呼んだのであった。⁽⁴⁶⁾

収容所から人々がつぎつぎと壺屋や牧志へ帰還し、そこが開発されたことにより、さらに国頭方面や九州・台湾などからの帰還者が集まってきた。こうして次第に壺屋から牧志にかけては人で溢れる人口過密地域になっていったのである。すると、壺屋の窯元や陶工たちと、移住者たちとの間で最初の一悶着が勃発した。壺屋先発隊は、窯業のために開放された土地であるといつて工場敷地を相当広くとっていた。そのため窯業に関係ない移住者たちから「工場敷地を吾々に開放せよ」という声が大きくなっていった。この対立は新生那覇市の仲介により、壺屋の業者たちが敷地をとりすぎているとして譲渡することで決着している。⁽⁴⁷⁾

このように壺屋から戦後那覇市の復興が始まったことにより、戦前期には郊外の農村地帯であった壺屋はいつきに人口過密地域へと転じた。戦後直後の工場用地と住宅地をめぐる軋轢は、このようにかつては郊外にあった陶磁器産地が市街地の中心部にきてしまったことによる潜在的な摩擦が表面化した事象といえよう。そしてこれは最終的に、一九六〇年代末から一九七〇年代初頭にかけての一大問題である、壺屋の登り窯への厳しい声へとつながっていくのである。

四、壺屋の煙害問題のはじまり

「一、はじめに」でも紹介した那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一五）

では、新聞報道などに依拠しつつ「一九六〇年代の後半、遅くとも一九六七年からは大規模な工場と同じように壺屋の登り窯から出る煙がばい煙として公害とみられるようになった」と位置づけている。⁽⁴⁸⁾

ところが、一九五〇年代末から六〇年代前半にかけての壺屋について研究史とは異なった事実が浮かび上がる。この点についての手がかりは、民藝運動に傾注した山口県徳山出身の版画家であり、日本工芸館小石原分館長も務めた高田一夫（一九〇六―一九八二）が、一九六三（昭和三八）年に壺屋を訪れた際の紀行文の中で言及した文章中にある。まずは当時の壺屋の状況について引用しておこう。

ガジュマルの森の丘の下の道をのぼってゆくと、もう壺屋町である。道に沿って、左方がやしめの窯につづく丘である。道沿いに段々と家屋がたてこんでいて、道の右側にも住家がびっしりと並んでいる。（中略）このあたりが焼けずに残ったので、自然とここに人が集まって、新しく住家がたてこんできた。そしていつのまにやら、いわゆる住宅地になってしまったそうである。こうして家屋の密集地帯ともいえる場所に、むかしながらに、窯はそのまま作業をつづけているので、いろいろと町内でも採めごとがあつたりしたという。⁽⁴⁹⁾

前章でみてきたように那覇市の復興が壺屋から始まったため、壺屋には家屋が建て込み、「家屋の密集地帯ともいえる場所」となっていたことが分かる。高田一夫につづいて翌一九六四（昭和三九）年に壺屋を訪れたバーナード・リーチもまた、「都市の真只中に伝統的な窯や古い石垣囲いの屋敷や瓦葺の家屋などが残っているのをみて、非常に強い感銘を受

けていた」という。⁽⁵⁰⁾一九六〇年代中頃には、壺屋といえは都市の真ん中の住宅密集地にある陶磁器産地という景観が出来上がっていたことが分かる。そしてこのような状況下で、「いろいろと町内で採めごとがあった」というのである。その「採めごと」について次に引用しよう。

登り窯がいま一基ある。この窯はただいま休窯ということである。戦後暫くは火を焚いていたが、やがて住家が建て込むにしたがつて、窯の煙が町内の苦情のもととなってきた。窯に火を入れると、正味三日か四日は炎と煙が出る。ことに沖繩の窯は松薪を焚くので、それがいっそう激しく、近所隣はたまらないというわけだ。結局、町内で補償を出し、前に書いた窯に四室を継ぎ足し、これの方で作業をするということを決着がついた。⁽⁵¹⁾

極めて明確な文章であるが、登り窯からの煙に対して周囲の住宅からの苦情が押し寄せ、一基の窯が休窯になっていたことが紹介されている。高田一夫はこの「休窯」について、別の旅行記でも触れている。そこでは、小橋川永昌から聞いた話として、次のように紹介されている。

那覇がまったくの灰燼に帰したにもかかわらず、この壺屋だけは完全なままで焼けのこりました。そのためかどうか、(中略)またたく間にこのあたりは、家の建て込んだ市街地となってしまったのです。それで、窯に火を入れているときなど、なにも知らない人は、すわ!火災!と慌てたりするんだそうです。こんなことから、窯を焚くと、煙りや火気が、町内の人々を悩ますこととなって、新垣栄三郎君の登窯

は、いまでは休窯ということ、使わないことになってしまいました。⁽⁵²⁾

ここで高田一夫は「休窯」が新垣栄三郎(一九二一―一九八四)の登り窯であったと言っているが、それはいつまで存在したのであろうか。新垣家の登り窯について、新垣栄三郎の息子である新垣勲(一九四四―二〇一八)は「僕が中学生の頃くらいまで」と語っている。また、同じく息子の新垣修(一九五四―)は「僕が幼稚園生の頃だったか」と語っている。⁽⁵³⁾この二人の回想から、新垣家の登り窯が「休窯」となったのは一九五〇年代末であったと推察される。

高田一夫は旅行記において、「巨窯(登り窯)」「すこし小ぶりの登り窯」「戦後に火を止めた登り窯」「九室の登り窯」「五室の登り窯」「休窯」という六基の登り窯について言及している。このうち「戦後に火を止めた登り窯」は、「古い窯の残骸」であったというから、戦後には全く使われていなかったとすれば、先述した戦後五基であったという窯数と一致する。⁽⁵⁴⁾

また、一九六六(昭和四一)年に現状分析を行った金城弘によると、上焼窯二基(東又窯と仁王窯)、南蜜窯一基(南又窯)、素焼窯一基(玉井小窯)の合計四基の窯が確認されている。素焼窯とは南蜜窯のことでもあるため、金城弘はこの両者について別物を焼成していると錯覚して区分したと思われるが、実質的には上焼窯二基と南蜜窯二基の合計四基の登り窯であった。ここからも、残されていた五基の窯のうち一九六〇年代前半までに一基の窯が焼成を止めていたことが分かる。⁽⁵⁵⁾また、一九六〇年前後の壺屋を写した写真集『なつかしの壺屋』⁽⁵⁶⁾には、東又窯、南又窯、仁王窯の三基の窯の写真が掲載されている。五基の登り窯のうち

一基（新垣榮三郎の登り窯）は、かなり早い時期に休窯に追い込まれてしまったのである。

つまり、従来の研究史が指摘してきたような、壺屋の煙害の問題が一九六〇年代後半以降のものであるという理解は正しくない。すでに一九五〇年代のうちから窯元とそれ以外の住民との間に摩擦を生みだしており、一九五〇年代末には五基のうち一基が「休窯」へと追い込まれていた問題だったのである。しかしながら金城弘による一九六六（昭和四一）年の調査でもまだ、壺屋の煙害をうけての窯の転換であるとか、壺屋からの移転問題などが発生していた様子はうかがえない。それまでの日常的な煙害が、公害問題として顕在化（社会問題化）していった状況を次章では確認しておくこととしよう。

五、壺屋の煙害問題と黒潮武秀

壺屋の一部ではすでに問題化していた登り窯の煙害について、それが沖縄全土の多くの人々の目の前に顕在化した切っ掛けは、よく知られているように一九六七（昭和四二）年八月から始まった『沖縄タイムス』の「民芸散歩」のコーナーの初回記事であった。⁵⁷この記事にはサブタイトルとして「窯の煙にもの言い」「郊外へひっ越しの声も」というセンチシヨナルな言葉が躍っている。

有名な「民芸散歩」初回の記事であるが、これまでその内容についてはあまり詳細な検討がなされてこなかった。しかし重要な内容が叙述されている。記事の中では数年前に壺屋で洗濯物屋を開業した人が、「洗たく物がよごれる」といって抗議に来た際の出来事が描かれている。その

時、「昔は、那覇の真ん中でブタを飼ってもよかった。今日ではどうか。禁じてあるではないか!」というのである。記事ではこの出来事を「ブタ、ツボ、同一論」と呼んでいるが、なんと壺屋の陶工の側はこの抗議を受けて、「先祖伝来二百年の窯をあきらめ、物置に使っている」というのである。高田一夫の一九六三（昭和三八）年の壺屋の描写に登場した「休窯」は、この洗濯物屋の抗議を受けて使用を止めた窯であったと思われる。

また記事では、琉球政府から立法院へと「バイエン規制法案」が送られたことが紹介されている。那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一五）では、日本本土における一九六二（昭和三七）年の「ばい煙の排出の規制等に関する法律」や一九六七（昭和四二）年の公害基本法、そして一九六八（昭和四三）年の大気汚染防止法などを受けて、本土復帰を目指す沖縄もまた一九六八（昭和四三）年に「ばい煙の排出の規制等に関する立法」がなされたことを指摘している。⁵⁸

琉球政府におけるばい煙規制そのものについては以上のような位置づけで正しいといえるが、それが壺屋の登り窯へと適用される点については、もう少し踏み込んだ分析が必要といえよう。先ほどの一九六七（昭和四二）年の『沖縄タイムス』「民芸散歩」の記事でも、「窯の煙にもの言いがついた。どうも公害の定義にあてはまりそーだ」という叙述がされている。⁵⁹もともとは「化学的な被害を受けるようなことではありません」といわれ、SO_xやNO_xなどを主たる対象としたばい煙規制の本丸とは程遠かったはずの壺屋の登り窯が、翌一九六八（昭和四三）年にその規制対象となったという転換を踏まえると、もう少しその歴史的な文脈に注意を払ってやる必要があるといえよう。

結論から言うならば、ばい煙規制と壺屋を結びつけたのは黒潮武秀（一九二二—二〇一四）の役割が大きい。そこでつづいて黒潮武秀の経歴を確認しつつ、壺屋の登り窯の規制とのかかわりについてみていくこととしよう。

黒潮武秀は、一九二二（大正一一）年に沖縄県島尻郡玉城村（現・沖縄県南城市）に生まれた。一九四一（昭和一六）年に名古屋市の大曾根中学校を卒業した後は、三菱重工業で働いた。戦後は沖縄へと戻り、牧港カンバン事務所を経て琉球政府工務部建築課へ入職してしばらく働いたのち、一九五二（昭和二七）年には丸秀茶舗を開業するとともに、政治活動にも積極的にかかわった人物である⁶¹。

当初は、沖縄における保革相乗りの地域政党であった沖縄社会大衆党に所属していた。沖縄社会大衆党は、保守系の議員が離脱した後には非共産の革新系地域政党となっていたが、一九五八（昭和二三）年の那覇市長選をめぐってさらに分裂してしまふ。この時に黒潮武秀は、兼次佐一（一九〇九—一九九八）らとともに沖縄社会大衆党を離脱したのであった⁶²。那覇市長選挙は沖縄社会大衆党が公認する平良辰雄（一八九二—一九六九）と、前那覇市長であった瀬長亀次郎（一九〇七—二〇〇一、共産党系の沖縄人民党）を支持していた革新系の統一人民戦線である民主主義擁護連絡協議会が公認した兼次佐一とで争われ、兼次佐一が那覇市長に選出された⁶³。その後、一九五八（昭和二三）年二月一六日には兼次佐一那覇市長を中心にしつつ本土の日本社会党の支部組織として沖縄社会党が結党されることになり、黒潮武秀は沖縄社会党の幹部ポストの一つである組織部長に名前を連ねている⁶⁴。

しかしながら沖縄社会党への支持は頭打ちを見せていく。兼次佐一が

那覇市長に選出されたのは、沖縄社会党に連なる面々への支持というよりは、前市長の瀬長亀次郎の支持母体である民主主義擁護連絡協議会への支持が高かったためである。那覇市長選の直後に行われた第四回立法院議員選挙では単独での候補者擁立が出来ずに、沖縄人民党と共同で民連推薦として五議席を獲得していたが、黒潮武秀が選対委員長を務めた一九六〇（昭和三五）年の第五回立法院議員選挙では沖縄社会党は単独での候補者擁立を行い、全候補が落選した⁶⁵。また黒潮武秀は翌一九六一（昭和三六）年七月の第六回那覇市議会議員選挙（定数三〇人）に七九人中六一位で落選している⁶⁶。

以上のような情勢を受け、本土の日本社会党は沖縄へテコ入れをすべく、一九六二（昭和三七）年二月には沖縄社会党を日本社会党沖縄県本部へと改組した⁶⁸。一九六五（昭和四〇）年二月七日に第三回定期大会が開催されている。そこで三つの重点政策が提案されているが、その三番目が「わずかばかりの自治権返還を引きかえに経済支配を強化しようとする米国の政策を粉砕し、知事公選をかちとる」というものであった。そしてその具体策として七つ提起されているうちの五番目が、「社会保障全般にわたり、本土並みの制度をかちとり、内容を引き上げていく。公害防止に就いてその対策を樹立させる」というものであった⁶⁹。一九五八（昭和二三）年の立党宣言には含まれていなかった「公害防止」がそれまでの「社会保障」の項目に加わったのである⁷⁰。沖縄でなかなか支持が広がらない日本社会党としては、社会政策の分野で貢献することにより有権者へと訴えることとしたのであろう。

一九五八（昭和二三）年の沖縄社会党の立党宣言で「社会福祉」も重視されていたためか、黒潮武秀は一九六〇（昭和三五）年二月には、

【表2】第8回立法院議員選挙における那覇市の7選挙区

(単位=票)

	沖縄自由民主党			革新共闘会議				票数差
	候補者名	得票数	当選	候補者名	政党名	得票数	当選	
第16区	大城 朝亮	5,914		仲松 庸全	沖縄人民党	9,664	○	3,750
第17区	翁長 助裕	6,953		森田 孟松	社会大衆党	10,259	○	3,306
第18区	新垣 義徳	6,508		嵩原 久男	社会大衆党	11,204	○	4,696
第19区	知念 実	4,938		古堅 実吉	沖縄人民党	10,369	○	5,431
第20区	伊良波長幸	5,877	○	黒潮 武秀	日本社会党	5,114		-763
第21区	友寄 喜弘	9,535		瀬長亀次郎	沖縄人民党	12,323	○	2,788
第22区	渡口 麗秀	3,817		安里積千代	社会大衆党	7,512	○	3,695

出典) 渡久地嶺雄 (1969) 43頁より作成。

知的障害者の養護施設が不十分なことを受けて、「沖縄手をつなぐ親の会」を組織する活動などに参加していた^①。このような社会政策分野での活動歴を踏まえ、一九六五(昭和四〇)年一二月にはガープ川沿いの水

上商店街をめぐって不良住宅街解消都市建設促進協議会の会長として防災都市の建設を訴えるとともに、那覇市民へのアピールを広く行っている^②。このような活動の延長線上で、党の方針に公害問題への対応が加筆されたことを受けて、一九六七(昭和四二)年頃から壺屋における登り窯からの煙への抗議活動が行われるようになるのである。

この際にも考慮しなければならぬのは沖縄の政治情勢である。一九六六(昭和四一)年一月に新たに琉球列島米国民政府(USCAR)の高等弁務官に就任したフェルディナンド・T・アンガー(Ferdinand Thomas Unger)陸軍中将は、翌一九六七(昭和四二)年には主席公選について各方面へと打診を行うようになっていた。このため一九六七(昭和四二)年中には主席公選に向けて

沖縄県民の期待感も高まっていたが、ついに一九六八(昭和四三)年二月の立法院議会で、アンガー高等弁務官は主席公選を正式に発表した。同年三月には沖縄自由民主党が那覇市長の西銘順治(一九二一―二〇〇一)を主席公選選挙へと擁立することを決めたため、任期満了による第八回立法院議員選挙と合わせて主席公選選挙・那覇市長選挙の三大選挙が一九六八(昭和四三)年一月に行われることとなったのである^③。

こうした政治情勢と平行して、一九六七(昭和四二)年六月一日の琉球政府局長会議で、「ばい煙の排出の規制等に関する立法案について」検討され、立法院へと法案が回されることが決定していた^④。先述のごとく「化学的な被害を受けるような」煙ではなかったため、壺屋の登り窯は法案の主たる対象ではなかったが、黒潮武秀らは「燃料は松を使うので煤塵は油っこく、小さい粒子となって戸のすき間などからようしゃなく入り込み、室内を汚す。そしてなかなか除去しにくい。また、窓を閉めきるので不快な生活を余儀なくされ、子供たちは汗もが出る、勉強ができないなどの影響を受けている」ことを壺屋の人々へと訴えかけた。そして一九六八(昭和四三)年には壺屋公害対策協議会を結成し、黒潮武秀は会長となったのであった^⑤。

壺屋公害対策協議会の会長を務めながら、黒潮武秀は日本社会党の那覇支部長として革新共闘会議に参加し、那覇市長選に平良良松(一九〇七―一九九〇)を擁立していた^⑥。また公選主席には屋良朝苗(一九〇二―一九九七)を擁立していた。それとともに、黒潮武秀もまた立法院議員選挙に第二〇区から立候補したのであった。選挙結果は、琉球主席選挙は屋良朝苗が勝利した。那覇市長選挙でも平良良松が勝利した。しかしながら、立法院議員選挙では三三議席中の過半数を超える一七議席を沖

縄自由民主党が確保した。日本社会党は候補者三人のうち現職の二人の当選にとどまり、新人候補の黒潮武秀は落選したのであった。【表2】に掲げたようにこの第二〇区は、第一六区から第二二区までの那覇市の選挙区のうち、各地で圧勝していた革新共闘会議が落とした唯一の選挙区となったのである。⁷⁷⁾

さて、黒潮武秀の第二〇区だけ革新共闘会議が負けた理由が、沖縄人民党や社会大衆党と日本社会党との那覇市民の支持の差であったのか、それとも壺屋公害対策協議会をはじめとする社会活動に那覇市民が共鳴しなかったからなのか、それとも単純に保守系色が強い選挙区だったのか、その分析をすることは本稿の目的ではない。これら政治情勢の中で、壺屋の煙害の問題が「公害問題」として大々的に扱われるようになっていたことが本稿においては重要である。このような政治的・社会的な情勢を背景に抱えつつ、壺屋の窯元側ではどのような対応がとられたのかを検討していくことが次章の課題となる。

六、高江洲育男の勝負

登り窯からでる煙に対する反対の声をうけて、壺屋の窯元たちの間でも何らかの対応が必要であるという声が高まっていた。その対応策の一つが窯をガス窯や電気窯へと転換することであり、もう一つの策が壺屋から移転することであった。このうち前者の窯を転換することについては、新垣栄三郎による「焼き物は、マキでたく火に、いのちを吹き込まれる。河井寛次郎氏（陶芸家）は「火の洗礼」と形容した」という言葉に表れているように、「性格のない規格品しか生まれてこない」と

して難色を示す反応が大きかった。⁷⁸⁾

そのような中でいち早く、煙突から黒煙を吐き出す登り窯から、ガス窯への転換を行ったのが高江洲育男（一九三〇―一九九七）であった。一九六九（昭和四四）年のことである。当初は、「うりし焼ちえしえ壺屋焼えあらんどお」と批判されたものの、翌一九七〇（昭和四五）年には小橋川永仁（一九一〇―一九七七）、國場健吉、新垣栄三郎らが次々とガス窯を導入していった。⁸¹⁾結果論からいうならば、高江洲育男のガス窯導入が成功したために、壺屋の他の窯元もそれにつづいたのである。つまり高江洲育男は壺屋におけるイノベーターであった。本章ではこの高江洲育男のガス窯導入について検討していくこととしよう。

高江洲育男は、壺屋の陶工の家の出身ながら浅野セメントに就職していた高江洲三郎の、長男として一九三〇（昭和五）年に大阪で生まれた。父の高江洲三郎が満洲国の安東省にあったセメント会社へと転職したため、高江洲育男も家族とともに満洲に転じ、満洲で国民学校高等科を卒業している。終戦後は一六歳で、一九四六（昭和二一）年に父の故郷である壺屋へと引き揚げをしている。その後、壺屋の名工であった島袋常恵と小橋川永弘の二人のところで、週に半分の三日づつ通って修行をしつつ働いたという。一九六三（昭和三八）年には三三歳にして父の高江洲三郎とともに高江洲製陶所を設立した。⁸³⁾そのため、高江洲三郎は壺屋で四代目、高江洲育男は壺屋で五代目の陶工であるが、独立した窯元としては新参者であった。

高江洲育男が得意としたのはシーサーであった。⁸⁴⁾シーサーとは沖縄における魔除けの獅子のことであり、大正末年ころから琉球古典焼のお土産物として、また一部では石造りや漆喰作りであった屋根獅子の代替と

【表3】 沖縄における建設投資（1968－1970）

（単位＝千ドル、GNEは百万ドル）

	1968年度 (A)		1969年度 (B)		1970年度 (C)		(A)→(B)	(B)→(C)
公共投資	39,548	28.5%	40,993	26.8%	43,927	21.2%	3.7%	7.2%
内政府	25,706	18.5%	24,781	16.2%	26,228	12.7%	-3.6%	5.8%
内町村	13,842	10.0%	16,212	10.6%	17,699	8.5%	17.1%	9.2%
民間投資	99,321	71.5%	111,804	73.2%	163,245	78.8%	12.6%	46.0%
内住宅	41,394	29.8%	46,444	30.4%	75,056	36.2%	12.2%	61.6%
内非住宅	57,927	41.7%	65,360	42.8%	88,189	42.6%	12.8%	34.9%
合計	138,869	100.0%	152,797	100.0%	207,172	100.0%	10.0%	35.6%
GNE		641.7		727.1		860.4	13.3%	18.3%

出典）琉球政府企画局企画部編（1971）138－139頁より作成。

して、次第に広まっていたものであった。⁽⁸⁵⁾それが先述のように、沖縄戦で壺屋と壺屋にあった壺屋焼のシーサーたちが焼け残ったこともあり、戦後に屋根獅子としてもさらに広まりをみせていた。

このようにシーサー作りを主に行っていた高江洲製陶所であるが、窯は壺屋にあった登り窯を利用していた。一九六六（昭和四一）年の調査では、東ヌ窯の使用者となっていた。⁽⁸⁶⁾そのため前章でみた煙害問題については、当事者として対応を迫られることとなったのである。

高江洲育男の孫である高江洲光によると、ガス窯への転換の一番の理由は、煙害によって壺屋から他地域へと移転を迫られることを嫌ったことにあるという。壺屋において窯元であり続けるために、いち早くガス窯へと転換したというのである。

加えて注目すべきは、釉薬の問題であるという。現在の釉薬であると、新しい釉薬を挑戦する時などを除

き、普段から使っている釉薬ならば、思い通りの釉の色をはっきりと出すことが可能であるという。ところが当時の釉薬は安定をしていなかったため、焼き上がりの色合いに揺れが出ていた。勿論、見る人が見れば登り窯の自然釉によるばやけた風合いなのか、釉薬が安定しないために出たばやけた風合いなのかの違いは分かるが、安定しない釉薬とガス窯の組み合わせでも、素人目にはそれなりの風合いが出せたのであった。

しかも、金城次郎が得意としたような雑器であれば、器の表面がたいらであるためにデザインと釉薬の色合いも比較的良く分かったのかも知れないが、高江洲育男が得意としたのは立体的で色合いも濃いシーサーである。そのため、ガス窯と安定しない釉薬とでつくられたシーサーは、素人目には登り窯なのかガス窯のかも分からない品質で、一点一点が個性を持った味わいのある作品に仕上がっていたのである。

しかしながら、民藝とはある種のイメージである。そのため、登り窯でつくったのかガス窯でつくったのかの違いは、品質以上にイメージとして違いがあった。先述のように「うりし焼ちえしえ壺屋焼えあらんどお」とまで後ろ指をさされた高江洲育男のガス窯がスタンダードへと転じていくには、もう一押しが必要であった。その一押しとなったのが一九七〇（昭和四五）年の住宅建築ブームである。

【表3】は一九六八（昭和四三）年度から一九七〇（昭和四五）年度にかけての、公共および民間の建設投資と、「国民」総支出（GNE）についてのデータを掲げたものである。一九六八年度から一九六九年度にかけては、「国民」総支出の伸びよりも建設投資の伸びは低かったのであるが、一九七〇年度にかけては二倍近くの伸びを記録している。その中でも、民間投資の内の住宅への投資の伸び率は六一・六％と、企業の設備

投資などを含む非住宅への投資の三四・九%の伸びを凌駕して圧倒的である。「一九七〇年度は住宅建築ブームの波にのつてかなりの活況を呈した」と言われている⁽⁸⁸⁾。

このような住宅建築ブームは、「一九六〇年代は、(中略)顕著な経済発展によって所得水準および生活水準は著しく向上し、それに伴って住宅の質的向上の意欲や、沖縄は台風常襲地帯であり多湿地帯であるという気象的条件からくる木造建築物への不安」が背景にあった⁽⁹⁰⁾。このような「旺盛な住宅需要に加えて政府施策による住宅建設資金の融資が軌道にのり、また民間金融機関における金融事情の好転、さらに近年急激に上昇しつつある建築単価および本土復帰による建築単価の高騰に対する懸念から、先取した方が得だという風潮など」が生じて、一九七〇年度に入ると住宅建築ブームとなったという⁽⁹¹⁾。一九六八(昭和四三)年には立法第一三一号として住宅建設資金融通法が定められていた。この際、住宅資金の融資を受けるためには建築基準法第二十七条に定められた耐火構造を持つ住宅であることが必要とされたが、それは「鉄筋コンクリート、れんが造等の構造」のことであった⁽⁹²⁾。

さて問題は、高江洲育男が得意としたシーサーとの関係である。石造りや漆喰作りのシーサーと並んで、陶器のシーサーもまた屋根獅子として利用されていた⁽⁹³⁾。木造の瓦屋根(本土の屋根よりも大量の漆喰を用いる)の場合には、左官職人が漆喰シーサーを同時に作っている場合も多く⁽⁹⁴⁾、陶器のシーサーは別に製作する必要があった。ところがコンクリート製の建築物では屋根に漆喰シーサーを設置する蓋然性はなく、屋根だけでなく門柱や玄関など様々なところに設置するために壺屋焼のシーサーが好まれるようになっていった⁽⁹⁵⁾。那覇市内で壺屋が唯一焼け残り、壺屋

焼シーサーに護り神としてのイメージが強まっていたことも背景にあった。こうして新たな巨大市場が誕生したのである。

その際に、従来の登り窯による生産は隘路を抱えていた。それは、宮地英敏(二〇〇八)第六章で明らかにしたように、燃料費である薪材価格の高騰という問題とともに、窯の共同所有によって個々の窯元が自由に経営できないという点があった。他の窯元も焼成前の半製品を準備し、皆が窯の中を半製品で埋めないと焼き始められないのである⁽⁹⁶⁾。高江洲育男のガス窯への転換には、この後者の点、東又窯の場合には窯を共同利用していたという問題が関係してくる。

先ほどの金城弘による一九六六(昭和四一)年の調査では、高江洲育男が使用していた東又窯は、小橋川源慶・新垣栄三郎・島袋常恵・金城次郎・金城敏雄・新垣栄一との共同利用であった⁽⁹⁷⁾。この場合、たとえ市場の急拡大によってシーサーを大量に生産したいとしても、雑器を生産する他の窯元たちの製品も窯に詰められないと、登り窯の焼成を行うことが出来ない。高江洲育男は登り窯からガス窯へと転換することによって、窯の共同利用から、個人での窯の所有へと転じたのであった。こうして高江洲育男は一九七〇(昭和四五)年の住宅建築ブームに際して、自分の望むスピードでシーサーを製作・焼成し、それを消費者へと供給することが可能となっていたのであった。

このような高江洲育男の成功を踏まえ、一九七〇(昭和四五)年中から他の窯元がガス窯への急転換も始まっていく。また、一九七五(昭和五〇)年に壺屋陶器事業協同組合が設立されると、小橋川永仁理事長のもとで高江洲育男は専務理事に就任するのであった⁽⁹⁸⁾。経営者としての實力を踏まえた大抜擢であったといえよう。

このように時代状況を察知し、周囲の強い反対の声を押し切りながら、壺屋において登り窯からガス窯への転換の先陣を切って成功したイノベーター高江洲育男について、孫の高江洲光は次のように語っている。「お爺ちゃんの一人勝ちさあ」⁽⁹⁹⁾。

七、ほかの壺屋の窯元たちの対応

これに対して壺屋からの移転については、沖縄タイムス社の社主であり沖縄民藝協会顧問でもあった豊平良顕（一九〇四―一九九〇）が「現在の壺屋は販売所にして、社会と接する窓口にする。窯は文化財に指定してもらって保護する。移転先は首里の高台がいいと思う。新しい窯、作業場を建てて、伝統の手法を守るにふさわしい環境にしたい」と述べていた。このため『沖縄タイムス』紙上では、金城次郎、新垣栄三郎、小橋川永昌のいわゆる壺屋三人衆も、移転費を負担してもらえらば「名案」であると条件付きながらも賛成意見を表明していると一九六七（昭和四二）年段階では紹介されていた⁽¹⁰⁰⁾。しかしながら壺屋の陶工たちの反対により、この移転話は立ち消えになったという⁽¹⁰¹⁾。

ところがこの壺屋三人衆のうち、金城次郎だけは首里へではなかったが移転を選択することになる。第六章でみたように、一九七〇（昭和三五）年前後から壺屋でもガス窯を導入する窯元が登場しはじめた。そのような情勢下で金城次郎は移転を決断していく。それに大きな影響を与えたのは、那覇高校や那覇商業高校で教諭をするかたわら「やちむん会」の会員（のちに会長）でもあった曾根信一（一九一七―二〇〇七）である⁽¹⁰²⁾。金城次郎は「どうしても登窯でないいいものは出来ないという人

たちもいた」中の一人であった。曾根信一は金城次郎と特に仲が良かったため、沖縄県文化財審議委員のメンバーからも「次郎さんのことを「何とかしてやれよ」と声を掛けられることがあったという。

そこで、曾根信一が壺屋を離れる気はあるか金城次郎に尋ねたところ、「うーん。大変なことだとは思いますが、いざとなったら窯の焼ける土地に行くほかに方法はあるまい」という返答を得た。そこで、曾根信一の所有する山が近々軍用地から解放されるという話を踏まえて、読谷村への移転を金城次郎へと持ち掛けたのであった。金城次郎のところへは、娘婿の宮城智が窯を持っていたコザ市をはじめ何か所から移転の声はかかっていたが、「全く誰も知らない土地へ行くより、顔なじみの君（曾根信一：引用者）の居る所がいいと思った」ために、読谷村への移転を決意したのであった。

ところが、曾根信一の所有する山が軍用地から解放されるのが遅れた。そのため、曾根信一は読谷村長の古堅宗光^{ふるけんそうこう}（一九二七―二〇二一、読谷村長一九七〇―一九七四）へと対応策を相談しに行った。すると古堅宗光は、金城次郎のことは知らないといいつつも、信頼する曾根信一からの申し出であったために、「よし引き受けた。幸いに解放されたばかりの村有地がある。そこにすぐ手はずをつけよう」といって用地を提供したのであった⁽¹⁰³⁾。以上のように、金城次郎と曾根信一との友人関係に加え、曾根信一と古堅宗光読谷村長との信頼関係があって、金城次郎の読谷村座喜味への移転は進んだのであった。

さて、壺屋の民藝を代表する陶芸家の一人である金城次郎はこうして読谷村へと移転していき、金城次郎を中心として読谷村座喜味には読谷村壺屋ができあがっていく。しかしながら一方で、高江洲育男（一九三

【表4】壺屋の窯元へのアンケート調査（1973年）

煙害への対応	窯元数（軒）	割合（％）
移 転	4	30.8
ガ ス 窯	6	46.2
関係ないから知らない	3	23.1
合 計	13	100.0

出典）金城季雄（1973）28-29頁より作成。

〇（一九九七）がガス窯で成功したのを皮切りにして、壺屋に残り続けて焼物を続けていく選択をした人たちも多かった。

一九七二（昭和四七）年三月に発行された『琉球の文化』誌上の座談会で壺屋に七基といわれていたガス窯は、同年八月に発行された『やちむん』第三号では九基となっており、わずか半年ほどでガス窯は二基増えていくというペースであった。

このガス窯の普及について、沖縄県労働工部商工課の行なったアンケート調査を【表4】に掲げておこう。これは金城次郎がすでに読谷村へと移転した後の調査であるが、金城次郎と

同じように他へと移転を考える窯元が二三軒のうち四軒ある。また、「関係ないから知らない」というのは、煙害を知らないとか煙害とは関係ないという意味ではなく、そのような声は関係ないから知らないという意味である。これが三軒あった。うち一軒はシーサーの名工であった島常賀であり、もう一軒は上焼の名工であった小橋川源慶（一九一一―二〇〇五）であると推察される。壺屋での薪による焼成にこだわった窯元である。⁽¹⁰⁶⁾

他方で、六軒の窯元がガス窯の導入を打ち出していることも注目される。すでに七基や九基という窯数であったから、複数のガス窯を所有する窯元もいたことを意味しているが、それがさらに拡大する傾向にあった。

ところが、このようなガス窯の導入に対しては大きな反対の声もあった。例えば、民藝運動に参加していた画家の城間喜宏（一九三五―二〇一九）は、「民芸というのは単なる企業でもなく、売るだけが目的ではないということですよ。たゞ単に売るためだったら電気でもいいしガスでもいいわけですよ」と憤り、民藝の観点から新しい窯への転換を嫌っている。⁽¹⁰⁷⁾ 沖縄物産センター社長であり沖縄民藝協会会長でもあった平良邦夫もまた、「ガス窯、重油窯は、飽く迄も便宜上の手段であり、品物の質からいうと、どうしても登り窯の物の質より、勝り得ない」と述べている。⁽¹⁰⁸⁾ また島常賀は、「がんとしてガス窯をきらうのも、自分の思ったとおりの色が出ないからだ」とし、特に「私のシーサーは荒焼きがほとんどだが、時には「いぶし」も作る。素焼をした後に、窯のすすで三ヶ月もかけて入念にいぶすと、黒々とした色あいのシーサーができあがる」のに、ガス窯は煤が出ないことを指摘している。⁽¹⁰⁹⁾

このように見ていくと、ガス窯によって壺屋焼の品質が劣化してしまうという声が大きいに思えるのであるが、実はもう一方で別の見解も存在している。たとえば、登り窯を求めて読谷村へと移転した金城次郎は、「窯から吐き出される煙が、住民の間で公害として問題視されるようになって（中略）止むなくガス窯に切り替わった。製品自体そんなに変わるとは思えないが、私はどうしても登り窯でないと作る気がしない」と述べている。⁽¹¹⁰⁾ 金城次郎はガス窯での出来が不満だったわけではなく、登り窯を使う精神を重んじて読谷村へと移転していたことが分かる。先ほどの城間喜宏が民藝の観点からガス窯に強く反対をして熱弁をふるい平良邦夫も賛同していた座談会でも、金城次郎は新垣栄三郎や大嶺実清（一九三二―、陶芸家、後に沖縄県立芸術大学学長）ら他の陶工とともに

ガス窯の良否について何も発言をしていない¹¹⁾。新垣栄三郎がすでにガス窯へと転換していた時期でもあり、窯元・陶工たちの見解と民藝運動の見解が乖離していたことが窺える。

また、先ほどの平良邦夫もガス窯で作られた製品について、「これは、生産者、販売者とも、謙虚に認めなければならない事実であるが、小さな製品では、差がないとか、却って品が良いとか云われる場合がある」と吐露している¹²⁾。「販売者」として、さすがに大きな高価格帯の製品については言及を避けているが、小品についてはガス窯で作られた商品の品質の良さを認めているのである。

以上のように、民藝運動においてや一部の窯元・陶工たちが登り窯の伝統を重視する一方で、多くの窯元たちの間ではガス窯が急速に普及をしていった。煙害による公害問題への対応という側面だけからは、このような速やかな転換を説明することはできない。一つには第六章の終わりに確認したガス窯の個人所有という経営的な問題であった。次章では、それとは別の、技術史的な側面から登り窯からガス窯への転換を考察してみることしよう。

八、登り窯、倒炎式薪窯、ガス窯

壺屋の窯元において使われてきた窯は登り窯であったが、それとは別に沖縄では長らく倒炎式薪窯の研究が続けられていた。一九二七（昭和二年）年に沖縄県工業指導所に設置され、所長の金澤武雄（一八九一—一九七六）のもと島袋常格（一九〇二—一九六六）・小橋川源慶・島袋常孝（一九一〇—没年不詳）らも働いていた。

戦後、琉球大学に応用学芸部芸術科が設置されると、大城皓也（洋画）、安次嶺金正（洋画）、安谷屋正義（デザイン）らが教員として採用された。一九六三（昭和三八）年には壺屋の窯元であった新垣栄三郎が講師として教鞭をとるようになるとともに、一九六四（昭和三九）年にはロックフェラー財団の資金援助うけて、美術工芸科陶芸教室が設置され倒炎式薪窯も作られている¹³⁾。教務補助職（後に主任）として、戦後は田辺製薬で働いていた島袋常孝が沖縄へと呼び戻されて雇われている¹⁴⁾。

ここで着目すべきは、倒炎式薪窯とはどのような技術であったのかという点である。これはもともと松村八次郎が改良発明したものであるが、登り窯での薪材の燃料費を節約するために石炭窯を開発していく過程で、それがなかなか実現しないために経営を安定させるべく改良発明された窯であった。いわば、技術的には松村式石炭窯の一段階前に当たる窯である。この松村式薪窯は、「今日（一九八八年：引用者）実業家の急務として研究を要するものは可成的窯内の火度を平均せしむること及び品物の「ペケ」即ち損傷少なき窯を案出するにあり」という目的で開発されたものであり、製品の歩留まり率を高めることを目指していた。従来の窯は、窯の内部の温度が不均衡であるため、窯内の各場所の温度を考えつつ様々な種類の生地や釉薬の製品を組み合わせて窯内に積んでいく必要があった。一方で、松村八次郎による倒炎式薪窯は、窯内の温度を一定にすることが可能であったために、この複雑な窯内の配置を考える必要がなくなったのである¹⁵⁾。いうなれば、従来の登り窯などが窯に合わせず半製品を配置し焼成していたのに対して、松村八次郎による倒炎式薪窯では自由に半製品を配置して焼成をすることが可能になったのであった。

松村八次郎は、倒炎式石炭窯を發明する途中でこの倒炎式薪窯を開発した。そのため、石炭が燃焼した際にその煤が器の表面に付着すると汚くなるため、結果的に薪の煤が付着するのも減らす改良が加えられていた。これにより、登り窯でみられた薪材の煤が釉薬の役割を果たす自然釉の効果も薄れていき、釉薬として意図的に施釉したものがそのまま表面に表出するようになったのである。この松村八次郎の倒炎式薪窯が戦前の沖縄県工業指導所に築かれ、そこで働いた島袋常孝らによって戦後の琉球大学に設置された。

島袋常孝は、倒炎式薪窯のこのような性質を踏まえ、登り窯よりも優れていることを戦後の沖縄で説いていた。「窯は倒炎式薪窯がもつとも優れている。特に作家性を求めるなら、偶然的要素が高い登り窯は避けるべきである」というのが島袋常孝のスタンスであった。¹⁹新垣栄三郎と島袋常孝が指導する琉球大学からは、比嘉信忠（大宜味村、山原窯）、下地正宏（大宜味村、江州窯）、田場博文（大宜味村、田場陶器）、仲宗根隆明（名護市、古我知焼）らの陶磁器作家を輩出している。²⁰壺屋出身では島袋常孝（のちに沖縄県立芸術大学教授）が学んでいる。

この島袋常孝に注目が集まったのは、一九七二（昭和四七）年四月一日から一〇日にかけて、平良邦夫が社長を務める沖縄物産センターの企画展として島袋常孝の陶器研究発表展が開催されたためであった。この研究発表展は、「陶器愛好者は勿論のこと、美術、デザイン、文化関係の各分野、新聞、ラジオマスコミ関係、その他あらゆる各層の諸氏の間に、衝撃的な感動を呼び起こした」という。²¹その理由は、粘土の配合比率を様々な組み合わせで検討し、かつまた釉薬に関してもその化学組成と調合比について明らかにした点にあった。戦後、田辺製薬で働いた際に体

験した化学分析力も生かされていたのであろう。この粘土と釉薬における化学的な分析によって、青磁釉、均窯釉（窯変）、鉄釉、黒釉、藁灰釉、キビ灰釉、緑釉といった壺屋の伝統的な焼き物を自由自在に作り上げていたのである。²²

この島袋常孝の研究発表展が重要なのは、倒炎式薪窯については強調されておらず、ただその化学的な分析に基づいて壺屋の伝統的な焼き物を作り上げられることを、多くの人々の目の前に提示したことであった。もちろん、倒炎式薪窯を使っていた島袋常孝は、松薪の灰が自然に器の表面にかかってできる自然釉も得意とした。²³しかしながら、倒炎式薪窯は倒炎式石炭窯の前段階として開発されていたために、自然釉が果たす役割は登り窯ほど大きくなく、それ故に粘土や釉薬に関する化学的分析が、比較的そのままに焼き上がりへと影響する関係にあった。

そして化学的に分析された粘土や釉薬を用いるとなれば、倒炎式薪窯とガス窯の差は無くなっていく。²⁴却って、松薪灰の自然釉をより排除できるガス窯の方が、化学的な焼成には向いている。また第六章でも触れたように、当時の釉薬は現在のものほどは安定しておらず、そのためにばやけた風合いができた。仮に現在の釉薬のようにハッキリと色合いが出るものであったならば、民藝を志向した当時の人々に受け入れられたかは分からないが、たまたま当時の釉薬をめぐる化学的な水準によって、ガス窯を用いても味わいのある風合いを実現したのであった。

こうして粘土や釉薬を化学的に作り出していくことの重要性を唱えた島袋常孝が、その製品を壺屋の人を含めた多くの人々の前に提示したために、壺屋の窯元や陶工たちは登り窯による偶然の火の力を借りずとも、化学的に伝統的な風合いを作り上げていく方向へと舵を切っていくこと

になるのである。

九、おわりに

戦前には、唐芋（サツマイモ）やサトウキビの畑が広がり、豚の飼育もおこなわれていた都市近郊農村の壺屋は、激しい沖縄戦のち那覇市でかろうじて焼け残っていた地域であった。そのために戦後の那覇市の復興は、壺屋からはじまり牧志へと拡大していくことになり、一転して壺屋は人口過密地域へと転じた。壺屋焼とは関係ない人々もまた、この地域に多く住むことになったのである。このために戦前と同じように焼き物を焼く昔ながらの窯元・陶工たちと、復興のために壺屋に住むことになった新しい住人たちは、潜在的に対立関係にあった。

その潜在的な対立関係が顕在化した一つが、登り窯から排出される煙をめぐる問題であった。従来から指摘されてきた一九六〇年代末よりも早く、すでに一九五〇年代末には煙害によって使用停止に追い込まれる登り窯も発生していた。

そのような登り窯の煙害問題が、さらにクロースアップされるのが一九六〇年代後半のことである。これも従来は日本本土への復帰を睨んで、日本本土の公害防止政策へと近づけるための顕在化であると捉えられてきたのであるが、松を燃やしたに過ぎない登り窯は成分的には公害防止政策の対象となるものではなかった。それを政策対象へと導いたのは、社会党系の政治家・市民活動家であった黒潮武秀の尽力によるところが大きい。勢力拡大に悩んでいた日本社会党沖縄県本部と同那覇支部長の黒潮武秀は、社会福祉政策の一環として公害問題にも着目し、登り窯の

煙害反対に大きな旗を振ったのである。こうして、潜在的にあった壺屋における窯元・陶工たちと焼き物に関係ない住民たちとの対立関係は顕在化していった。

この問題に、壺屋で真っ先に対応したのは高江洲育男であった。壺屋を離れることなく壺屋で窯元を続けることを望んだ高江洲育男は、いち早く共同利用の登り窯を抜けて個人でガス窯を設置した。釉薬により十分な風合いを出すこともできたが、それでもガス窯で焼いたような製品は壺屋焼ではないという批判も受けていた。ところが、高江洲育男がガス窯を導入した翌年、沖縄は住宅建築ブームに見舞われた。高江洲育男が得意としたのはシーサーであり、次々とつくられるコンクリート造りの住宅に壺屋焼のシーサーのニーズが高まったのである。このため、窯を共同利用して他の窯元と生産を合わせなければならない登り窯ではなく、個人所有のガス窯で自由に生産量を調節できる高江洲育男は優位に経営を行うことができた。

高江洲育男の成功を踏まえ、壺屋ではガス窯に転換する窯元がいくつも登場した。一方で、登り窯にこだわって読谷村座喜味に移転した金城次郎のような窯元も発生した。また、細々と小さな薪窯を用いて壺屋で煙を出しつつシーサー作りをした島常賀のような窯元も存在した。しながら多数派は、高江洲育男の後を追ってガス窯での生産に転換した窯元たちであった。

琉球大学で教務補助をしつつ、粘土や釉薬の化学的な分析に取り組んでいた島袋常孝という陶工・技術者がいた。登り窯からガス窯へと転換を迫られている時期に、この島袋常孝が化学的な手法を用いしつつ伝統的な壺屋焼の研究発表展を行うこととなった。そこへの出品物は見事であ

り、それまで登り窯の「火の洗礼」を受けなければ出し得ないと思われていた風合いが、見事に化学的に再現されていたのであった。こうして、シーサーだけでなく雑器を生産する窯元たちも、心置きなくガス窯へと転換していくことが出来たのである。

そして、一九七二（昭和四七）年の本土復帰や、一九七五（昭和五〇）年の沖縄海洋博覧会によって沖縄への観光旅行が増え、壺屋焼は民藝ブームの恩恵を受けることとなる。その際にも、個人所有のために一人一人の経営者のペースで生産が出来るガス窯を用いながら、壺屋の窯元たちは製品を供給していくことになるのである。

注

- (1) 倉成多郎（二〇一四）一〇六一―一〇八頁。壺屋地区が那覇市における戦後復興の出発点であったことについては、渡名喜明（二〇〇三）二六七―二六八頁や川平成雄他編（二〇二二）第一章にも詳しい。
- (2) 那覇市立壺屋博物館編（二〇一五）一一頁
- (3) 倉成多郎（二〇一四）一〇八一―一〇九頁。
- (4) 那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一八）六〇―六一頁、
- (5) 倉成多郎（二〇一四）一七五―一七六頁。
- (6) 那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一五）第二章。
- (7) 宮地英敏（二〇一〇）。
- (8) 金城次郎（一九八〇）二六頁。
- (9) 宮城篤正（一九七四b）一二九頁。
- (10) 宮城篤正（一九七四b）一三一頁。
- (11) 宮城篤正（一九七四b）一三四頁。
- (12) 河井寛次郎（一九三四）、柳宗悦編（一九四二）七三頁。この情景叙述は壺屋の特徴をよくとらえているため、外間正幸・宮城篤正（一九七四）一三二頁などでも紹介されている。
- (13) 大城精徳（一九七三）一一頁。
- (14) 伊波普猷・真境名安興（一九一六）二九三―三〇三頁。
- (15) 濱田庄司（一九七二）六頁。濱田庄司の回顧については星雅彦（一九九六）一六頁でも紹介されている。
- (16) 壺屋の景観についての論考ではなく、壺屋が民藝運動によって活性化していく紹介としてであるが、星雅彦（一九九六）は「壺屋を発見した外からの目」という視点を打ち出している。
- (17) 猪子（一九一二）四七頁。
- (18) 喜久山朝重（一九九三）一五一頁。
- (19) 大城精徳・小橋川秀義（一九七二）一九頁。
- (20) 倉成多郎（二〇一四）二八頁。
- (21) 柳宗悦（一九四二）一八九―一九一頁および宮城篤正（一九七四a）一〇四頁。
- (22) 照屋善義（二〇〇〇）一二頁。
- (23) 外間正幸（一九七四）二七頁。
- (24) 島常賀（一九八二）二一五頁。倉成多郎（二〇一四）九九頁によるとバッテリーケースも作っていたようであるが、「でっち」とはこのことであろうか。また、平良邦夫（一九九五）viii頁によると、「軍隊用食器、飯碗、汁碗、まかい、深皿、電柱架設碍子、電池容器など数万点」をつくっていたという。
- (25) 金城次郎（一九八〇）一八頁。
- (26) 金城次郎（一九八〇）一八頁、島常賀（一九八二）二一五頁、喜久山朝重（一九九三）一四〇頁。ただし、弟子たちや瓦職人などで亡くなった陶

工たちも多い。

- (27) 水尾比呂志（一九六四）四五頁。
- (28) 河井寛次郎（一九三四）、柳宗悦編（一九四二）九二頁。
- (29) 平良邦夫（一九九五）viii頁。
- (30) 倉成多郎（二〇一四）九八頁。水尾比呂志（一九六五）二二三頁ではシーサーを戦後の土産物だと説明しているが、倉成多郎の論考にもあるようにこれは正しくない。
- (31) 安谷屋正量（一九七四）七〇頁および七三頁。ただし、安谷屋正量はヘンリー・H・ローレンスと記述しているが、その後は神学校で学んで司祭となったという経歴からニール・ヘンリー・ローレンスの名前を記憶違いしていたものと思われる。
- (32) 安谷屋正量（一九七四）七二頁および倉成多郎（二〇一四）九四―九五頁。倉成多郎（二〇一四）一〇〇頁では、壺屋への帰還について城間康昌らがアメリカ軍との交渉も行ったかのように叙述されているが、安谷屋正量のもとで協力した局面もあったのであろう。
- (33) 川平成雄他編（二〇二二）第一章。
- (34) 島常賀（一九八二）二二二―二三三頁。
- (35) 金城次郎（一九八〇）二〇頁。
- (36) 島常賀（一九八二）二三三頁。
- (37) 島常賀（一九八二）二二五―二二六頁。
- (38) 那覇教育史研究会編（二〇〇四）二―三頁。
- (39) 親里嘉英（一九五二）。ただし親泊政睦（一九五一）二頁では創立時の児童数を一五二人としている。初代校長の親泊政睦と三代目校長の親里嘉英とで創立時の児童数が異なっているが、ここでは親泊政睦の回顧は他の記述でも間違が多いため親里嘉英のいう一五五人という人数を採用した。
- (40) 安谷屋正量（一九七四）七二頁―七三頁。
- (41) 那覇教育史研究会編（二〇〇四）五一―七頁。
- (42) 壺屋小学校文化部編（一九七六）一二頁。
- (43) 具志堅悦子（一九五二）一一頁。
- (44) Quonset Hutとは、プレハブ工法によって建設されるカマボコ型の建物である。
- (45) 島常賀（一九八二）二三六―二二七頁。ただし、島常賀は壺屋初等学校の牧志移転を創立から一年ほど後のことだと回顧しているが、時期に関しては誤りである。
- (46) 安谷屋正量（一九七四）七三頁。安谷屋正量はマチグワの始まりを戦後の壺屋・牧志だとしているが、前近代からまちぐわがあったことは朝岡康二（一九九六）に詳しい。宮地英敏他（二〇一九）も朝岡康二説に依拠している。
- (47) 安谷屋正量（一九七四）七三―七四頁。
- (48) 那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇一五）一一頁。
- (49) 高田一夫（一九六四）二二〇―二二二頁。
- (50) 大城精徳・小橋川秀義（一九七二）一七頁。
- (51) 高田一夫（一九六四）二二二頁。
- (52) 高田一夫（一九六三）一一六―一一七頁。先述のように、壺屋が完全なままで焼け残ったというのは誤りである。伝文のために間違えたのである。
- (53) 赤嶺由紀子（二〇一〇）二五頁。
- (54) 水尾比呂志（一九六四）四五頁。
- (55) 金城弘（一九六六）一二頁。窯名について柳宗悦（一九四二）一八九―一九〇頁より推定。
- (56) 壺屋町民会自治会編（二〇一〇）。
- (57) 『沖縄タイムス』一九六七（昭和四二）年八月六日、一二頁。

- (58) 那覇市立壺屋焼物博物館編(二〇一五) 一一頁。
- (59) 『沖縄タイムス』一九六七(昭和四二)年八月六日、一二頁。
- (60) 大城精徳編(一九七二) 一四頁の平良邦夫の発言。
- (61) 伊集の木会編(作成年不詳)。
- (62) 沖縄タイムス社編(一九五九) 五六頁。また、一九五八(昭和三三)年の那覇市長選をめぐるのは村岡敬明(二〇二〇)も参照のこと。
- (63) 沖縄県町村会三十年のあゆみ編集委員会編(一九七八) 八一九頁。
- (64) 沖縄タイムス社編(一九五九) 六一頁。
- (65) 沖縄タイムス社編(一九五九) 七一―七三頁。村岡敬明(二〇二〇)一七頁では沖縄社会党が第四回立法院選挙で五議席を獲得したと記述しているが、これは誤りである。
- (66) 沖縄タイムス社編(一九六二) 三四―三五頁。
- (67) 那覇市(二〇二二)。
- (68) 沖縄タイムス社編(一九六五) 一一〇頁。
- (69) 沖縄タイムス社編(一九六六) 八六頁。
- (70) 沖縄社会党の立党宣言は南方同胞援護会編(一九六八) 一一―三―一四頁による。
- (71) 全日本特殊教育研究連盟他編(一九六五) 一六六頁。ただし、伊集の木会編(作成年不詳)によると黒潮武秀は障害を持つ子どもの親でもあり、当事者として主体的に活動を行っていた側面も大きいことを捨象することはできない。
- (72) 沖縄タイムス社編(一九六六) 二八三頁。
- (73) 屋良朝苗(一九七七) 八九―九〇頁。
- (74) 琉球政府総務局渉外広報部渉外課編(一九六七) 三頁。
- (75) 沖縄県高等学校教職員組合編(一九七三) 三九頁。
- (76) 琉球新報社編(二〇〇八) 一一七頁。
- (77) 渡久地嶺雄(一九六九) 四三頁。
- (78) 『沖縄タイムス』一九六七(昭和四二)年八月六日、一二頁。
- (79) 高江洲光インタビュー(二〇二三年八月三〇日)。曾根信一(一九七二)一三頁では高江洲育男のガス窯導入を一九六八(昭和四三)年としているが、これは間違いである。
- (80) 宮城篤正ほか(一九九二) 三二頁の高江洲育男の発言。「お前が焼いたのは壺屋焼じゃないぞ」という意味。
- (81) 那覇市立壺屋焼物博物館編(二〇一五) 一七頁。
- (82) イノベーション理論についてはロジャー・E・M(二〇〇七)を、陶磁器業におけるイノベーターについては宮地英敏(二〇一一)を参照のこと。ただしガス窯の導入自体は全国的にすでにいくつもの先例があるため、その点では高江洲育男はアーリーアダプターであったといえる。
- (83) 城間幸子他編(一九九八) 五二頁。
- (84) 城間幸子他編(一九九八) 一四―二八頁。
- (85) 倉成多郎(二〇一四) 九六―九八頁。また、この点については別稿を準備中である。
- (86) 金城弘(一九六六) 一二頁。
- (87) 以下、特段の注記がない場合には本章の記述は高江洲光インタビュー(二〇二三年八月三〇日)による。
- (88) 琉球政府の会計年度は七月から翌年六月までであったため、一九六八年度は一九六八年七月から一九六九年六月まで、一九六九年度は一九六九年七月から一九七〇年六月までである。
- (89) 琉球政府企画局企画部編(一九七二) 一四七頁。
- (90) 琉球政府企画局企画部編(一九七二) 一五〇頁。
- (91) 琉球政府企画局企画部編(一九七二) 一四〇頁。
- (92) 住宅建設資金融通法および建築基準法は、沖縄県公文書館所蔵の「法令

の整備に関する書類」シリーズによる。

- (93) 屋根獅子については大城精徳（一九七〇）やSHISA編集委員会編（二〇〇三）、末永航（二〇〇五）が参考になる。

- (94) 漆喰シーサーの製作については高江洲義寛編（一九八二）九五―九九頁の「漆喰製・屋根獅子ができるまで」による。

- (95) 高江洲光インタビュー（二〇二三年八月三〇日）による。

- (96) 宮地英敏（二〇〇八）一七四―五頁。

- (97) 金城弘（一九六六）一二頁。

- (98) 城間幸子他編（一九九八）五二頁。

- (99) 高江洲光インタビュー（二〇二三年八月三〇日）による。

- (100) 『沖縄タイムス』一九六七（昭和四二）年八月六日、一二頁。

- (101) 倉成多郎（二〇一四）一〇八頁。

- (102) 曾根信一の生没年については娘婿にあたる仲松庸次氏に伺った。

- (103) 曾根信一（二〇〇〇）六〇―六二頁。また、金城次郎（一九八〇）三三頁も参考のこと。

- (104) 大城精徳編（一九七二）一五頁の新垣栄三郎の発言。

- (105) 曾根信一（一九七二）一三頁。

- (106) 星雅彦（一九九六）二二頁では、九三歳になった島常賀や八五歳になった小橋川源慶が壺屋で窯を焚き続けている様子が紹介されている。ちなみに小橋川源慶は、ロクロも電動ロクロを用いることを嫌い、蹴轆轤にこだわっていたという。

- (107) 大城精徳編（一九七二）一五頁。

- (108) 平良邦夫（一九七二a）七五頁。

- (109) 島常賀（一九八二）二三四頁。

- (110) 金城次郎（一九八〇）三三頁。ただし結果論に過ぎないが、金城次郎が登り窯とガス窯の品質に大差がないとしてガス窯を選択していたとしたら、

一九八五（昭和六〇）年に沖縄県民として初の重要無形文化財技能保持者（いわゆる人間国宝）に指定されたかどうかは分からなかったといえよう。

- (111) 大城精徳編（一九七二）一四―一六頁。

- (112) 平良邦夫（一九七二a）七五頁。

- (113) 大城精徳（一九七四）一二五頁および赤嶺由紀子（二〇一〇）三二頁。このうち、一九七一（昭和四六）年に新垣栄三郎は助教授に採用されている。

- (114) 那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇〇八）四八―六〇頁。

- (115) やちむん会誌編集部企画編（二〇一二）二六―二七頁。

- (116) 那覇市立壺屋焼物博物館編（二〇〇八）五九頁。

- (117) 松村八次郎の石炭窯の開発については宮地英敏（二〇〇八）第六章および宮地英敏（二〇一〇）を参照のこと。

- (118) 池田文治編（一九三九）二二七―二二八頁。もとは『大日本窯業協会誌』明治三二年十月号による。

- (119) やちむん会誌編集部企画編（二〇一二）三二頁。

- (120) 倉成多郎（二〇一四）一一二頁。

- (121) 平良邦夫（一九七二b）四八頁。

- (122) 平良邦夫（一九七二b）五〇―六〇頁。

- (123) 平良邦夫（一九七二b）五二頁。

- (124) ただし、島袋常孝自身は倒炎式薪窯の素晴らしさに大きくこだわっており、ガス窯へ転換することは嫌った点に注意を要する。そのような点では、島袋常孝は科学者というよりも職人としてのこだわりを持ったのである。

参考文献

- 赤嶺由紀子（二〇一〇）『壺屋三人男―小橋川永昌（二代目仁王）、金城次郎、新垣栄三郎』関連講座報告 島袋常秀「私がみた壺屋三人男」『壺屋焼物博物館紀要』第一号
- 朝岡康二（一九九六）『沖縄諸島における「町」の形成』『国立歴史民俗博物館研究紀要』第六七巻
- 安谷屋正量（一九七四）『激動の時代に生きて』角川書店
- 池田文治編（一九三九）『松陶松村八次郎伝』松村八次郎翁追悼記念会
- 伊集の木会編（作成年不詳）『いじゅうの木会の心―社会福祉法人伊集の木会』（<http://www.iijunokikai.sakura.ne.jp/iijunokikai20150803/opinion.html>）（閲覧日：二〇二三年八月九日）
- 猪子（一九二二）『通俗講和 第二回 養豚の話』『肉と乳』第三巻第一〇号
- 伊波普猷・真境名安興（一九二六）『琉球の五偉人』小沢書店
- 大城精徳（一九七〇）『琉球の屋根獅子』大城精徳
- 大城精徳（一九七三）『壺屋の旧跡と陶工連』『やちむん』第四号
- 大城精徳（一九七四）『現代沖縄の工芸家（六）新垣栄三郎』『琉球の文化』第五号
- 大城精徳編（一九七二）『座談会 ―あらゆる角度から― 琉球の焼物を語る』『琉球の文化』創刊号
- 大城精徳・小橋川秀義（一九七二）『壺屋の村（一）』『琉球の文化』創刊号
- 沖縄タイムス社編（一九五九）『沖縄年鑑 一九五九年度』沖縄タイムス社
- 沖縄タイムス社編（一九六二）『沖縄年鑑 一九六二年度』沖縄タイムス社
- 沖縄タイムス社編（一九六五）『沖縄年鑑 一九六五年度』沖縄タイムス社
- 沖縄タイムス社編（一九六六）『沖縄年鑑 一九六六年度』沖縄タイムス社
- 沖縄県高等学校教職員組合編（一九七三）『沖縄の公害と教育 第一集』沖縄県

高等学校教職員組合

- 沖縄県町村会三十年のあゆみ編集委員会編（一九七八）『沖縄町村会三十年のあゆみ』沖縄県町村会
- 親里嘉英（一九五一）『発刊に当りて』金城順亮編『創立五周年記念創刊号 子ばと』那覇市壺屋初等学校
- 親泊政睦（一九五一）『意義ある五周年をむかえて』金城順亮編『創立五周年記念創刊号 子ばと』那覇市壺屋初等学校
- 川平成雄・松田賀孝・新木順子編（二〇二二）『戦後沖縄生活史事典一九四五―一九七二』吉川弘文館
- 河井寛次郎（一九三四）『壺屋と上焼』『工芸』第九九号（のちに、柳宗悦編（一九四二）、河井寛次郎（一九五三）などに採録）
- 河井寛次郎（一九五三）『火の誓い…河井寛次郎随筆集』朝日新聞社
- 喜久山朝重（一九九三）『にぬふぁ星―喜久山朝重自伝―』喜久山朝重
- 金城季雄（一九七三）『壺屋登り窯の公害問題について』『やちむん』第四号
- 金城次郎（一九八〇）『私の戦後史』沖縄タイムス社編『私の戦後史 第二集』沖縄タイムス社
- 金城弘（一九六六）『那覇市壺屋町の陶業の地理学的研究』『琉大地理』第五号
- 具志堅悦子（一九五二）『創立当時を思いうかべて』金城順亮編『創立五周年記念創刊号 子ばと』那覇市壺屋初等学校
- 倉成多郎（二〇一四）『壺屋焼入門』ポーターインク
- 島常賀（一九八二）『私の戦後史』沖縄タイムス社編『私の戦後史 第六集』沖縄タイムス社
- SHISA 編集委員会編（二〇〇三）『シーサーあいらんど』沖縄文化社
- 城間幸子・高江洲忠・渡名喜明編（一九九八）『手捻り五〇年 壺屋に生きる』高江洲育男
- 末永航（二〇〇五）『沖縄と「シーサー」』『文化資源学』第三号

全日本特殊教育研究連盟・日本精神薄弱者愛護協会・全日本精神薄弱者育成会

編 (一九六五)『精神薄弱者問題白書 一九六五年版』日本文化科学社

曾根信一 (一九七二)『続、壺屋町見聞覚え書』『やちむん』第三号

曾根信一 (二〇〇〇)『読谷村壺屋窯の始まり——金城次郎さんのこと——』『やちむん』第二二号

平良邦夫 (一九七二a)『民芸の原点と現状』『琉球の文化』第二号

平良邦夫 (一九七二b)『島袋常孝氏の陶芸』『やちむん』第三号

平良邦夫 (一九九五)『解題 民藝運動と琉球の陶器』柳宗悦編『琉球の陶器』

榕樹社

高江洲義寛編 (一九八二)『青い海』第二卷第七号 (通巻第一一五号)

高田一夫 (一九六三)『九州・沖縄の民藝』栄宝社

高田一夫 (一九六四)『民芸のこころ』日研出版

壺屋小学校文化部編 (一九七六)『創立三十周年記念誌』那覇市立壺屋小学校

壺屋町民会自治会編 (二〇一〇)『なつかしの壺屋』壺屋町民会自治会

照屋善義 (二〇〇〇)『沖縄の陶器 技術と科学』照屋善義

渡久地嶺雄 (一九六九)『圧勝した主席、立法院選挙』阿部義美編『前衛』日本

共産党中央委員会理論政治誌』第二八八号、日本共産党中央委員会

渡名喜明 (二〇〇三)『壺屋焼物博物館』池澤夏樹編『オキナワなんでも事典』

新潮社

那覇教育史研究会編 (二〇〇四)『壺屋初等学校日誌 (一九四六年)』沖縄大学

地域研究所

那覇市 (二〇一一)『過去の記録一覧』(https://www.city.naha.okinawa.jp/admin/senkan/kiroku/sigi_files/sigikiroku_221115.pdf) (閲覧日: 二〇一三年八月九

日)

那覇市立壺屋焼物博物館編 (二〇一五)『現代沖縄陶芸の歩み』那覇市立壺屋焼

物博物館

那覇市立壺屋焼物博物館編 (二〇一八)『民藝と壺屋焼』那覇市立壺屋焼物博物

館

南方同胞援護会編 (一九六八)『沖縄問題基本資料集』南方同胞援護会

濱田庄司 (一九七二)『沖縄の陶技』『民藝』第二三三三号

外間正幸 (一九七四)『風土と環境』外間正幸・宮城篤正『カラー日本のやきもの1沖縄』淡交社

星雅彦 (一九九六)『壺屋今昔』『やちむん』第二二号

水尾比呂志 (一九六四)『沖縄の民芸』美術出版社

水尾比呂志 (一九六五)『日本のやきもの』別巻、淡交新社

宮城篤正 (一九七四a)『やちむん』ノートから(Ⅲ)『琉球の文化』第五号

宮城篤正 (一九七四b)『歴史と技術の伝統』外間正幸・宮城篤正『カラー日本

のやきもの1沖縄』淡交社

宮城篤正・平良邦夫・大城宏捷・高江洲育男・高安康一・星雅彦 (一九九二)

『座談会 やちむん会の今日の問題』『やちむん』第一一号

宮地英敏 (二〇〇八)『近代日本の陶磁器業』名古屋大学出版会

宮地英敏 (二〇一〇)『石炭窯の普及における地域的偏在』荻野喜弘編『近代日

本のエネルギーと企業活動』日本経済評論社

宮地英敏 (二〇一一)『近代日本の中小陶磁器業における企業家活動』『企業家

研究』第八号

宮地英敏・川満直樹・山内昌斗・鍛冶博之・西尾典子 (二〇一九)『沖縄のうれ

んプラザの現状と課題ー農連市場からのマチグワー文化の創造的継承にむ

けて』『地球社会統合科学』第二六卷第二号

村岡敬明 (二〇二〇)『瀬長亀次郎の那覇市長追放と一九五八年那覇市長選挙』

『法政論叢』第五六 卷第二号

やちむん会誌編集部企画編 (二〇一一)『座談会 島袋常孝を語る』『やちむ

ん』第一六号

柳宗悦（一九四二）「現在の壺屋とその仕事」柳宗悦編『琉球の陶器』昭和書房
柳宗悦編（一九四二）『琉球の陶器』昭和書房

屋良朝苗（一九七七）『屋良朝苗回顧録』朝日新聞社

吉田健太（二〇二二）「壺屋古窯群窯跡分布調査報告」『壺屋焼物博物館紀要』
第二二号

琉球新報社編（二〇〇八）『沖繩列伝 戦後史の証言者たち』琉球新報社

琉球政府企画局企画部編（一九七二）『沖繩経済の現状』琉球政府

琉球政府総務局渉外広報部渉外課編（一九六七）「局長会議録一九六七年第二九
号臨時」沖繩県公文書館所蔵『琉球政府文書 局長会議録一九六七年』（番
号 RDAE011019）

ロジャー・E・M（二〇〇七）『イノベーションの普及』（三藤利雄訳）翔泳社

※本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、21K0614）「アメリカ統治から本土
復帰への移行期にみる沖縄の経済問題」による研究成果の一部である。